

カースト・ダリト問題の作品と雑誌 ‘Hans’ (94, 95)

石 田 英 明

Works on The Caste and Dalit Problem Appearing in The ‘Hans’ (94, 95)

Hideaki Ishida

本稿はヒンディー語の月刊文芸雑誌 ‘Hans’ (1994年と95年) に掲載されたすべての作品のうち、カースト問題やダリト問題を扱った作品を取り上げ、その内容を紹介し、一部に寸評を加えた研究資料である。94年と95年を選んだのは資料が揃っているからで、資料が揃えば創刊（正式には復刊）された86年から順次まとめる予定である。

ヒンディー語では70年代の中頃からマラーティー語のダリト文学が少しずつ紹介されるようになったが、ヒンディー語自身のダリト文学は90年代にようやく姿を見せるようになった。そのことで雑誌 ‘Hans’ が果たした役割は大きいので、それを具体的に跡付けるためにこの作業を行った。当初はダリト問題の作品に絞っていたが、この社会問題はカースト制度の全体に関わっているので、カースト問題を描いた作品全てを対象とした。（カーストへの言及が微小で作品のテーマや内容とほぼ無関係であるようなものは除外した。）

各作品には始めに番号が付いている。例えば、H1994-1-24という番号は雑誌 Hans の1994年1月号の24ページからこの作品が始まることを意味している。番号の次の（ ）は作品の種類を示す。元の言語がヒンディー語以外の場合はここで元の言語が示される。次に作品の題名を下線を施して示し、その次の（ ）に仮の日本語訳を示した。最後には著者名を名・姓の順に示した。翻字は筆者のルールで簡略化したものになっている。

1994年

H1994-1-24 (短編、Marathi) Nag Picha Kar Rahe Hain (蛇が追いかけてくる) Sharankumar Limbale

物語 —— 私は近隣随一の大地主の息子。我が家には17代に亘り我が家に奉仕する Mahar の Kondya 家族がいる。私の父は MLA。後年、父の選挙区が指定選挙区になり、父は召使の Kondya を自分の傀儡として立候補させた。ところが、その息子 Daulya (妻の実家に住んでいる) も立候補した。Daulya が選挙運動に来た時、我々は彼を殴り殺した。死ぬ時の Daulya の眼は怒った

蛇のようだった。5年後、我々は裁判で無罪になった。裁判所の外で Daulya の妻が私を見る眼も怒った蛇のようだった。

H1994-1-71 (評論) Balmiki to Brahman The (バールミーキはバラモンだった) Ratnkumar Sambhariya

内容——1993年3月号の編者の巻頭言 Teri Meri Uski Bat で Yadav は Valmiki がシュードラであったと書いたが、彼がバラモンであったことは作品中に度々書かれているし、他に次の4点を挙げることができる。1. ラーマが仏陀を誹謗した。2. ラーマはシャンブーカを殺害した。3. ラーマに放逐された Sita は Valmiki の庵に身を寄せた。また、ラーマの祭儀に Valmiki が参加した。4. シュードラと女性を苦しめる作品を書いて、Valmiki は当時のバラモン体制に協力した。[評——Yadav が shudra Valmiki という言葉を使った理由は不明である。]

H1994-2-17 (短編) Men-Varsima ka Git (メーンワルスィーマーの歌) Shaival

物語——Bisesar Manjhi は郡の Block Office の用務員で、Men Varsima と呼ばれている。事務所の役人達からひどい扱いを受け、酒で恐怖心を紛らそうとするため、勤務状態も良くない。かつて彼の家(村?)は(上位カーストの?)襲撃を受け(?),父や叔父は殺された。彼はその補償として Block Office に採用されたが、毎日いやがらせを受ける。政府から下りた補償金10万ルピーは兄嫁が持っていて、この兄嫁には誰か男がいるので、彼を寄せ付けない。彼は補償金目当てに次は自分が殺されるのではないかと恐れている。[評——言葉が方言で難かしい。Men-Varsima の意味不明。物語は経緯が前後し、不明の部分が残る。]

H1994-2-21 (短編) Kamina (卑しい奴) Madhukar Singh

物語——Sarubera 炭鉱近くの村。元の先住民達は現在 Mahato とか Manjhi などのカーストになっている。Mahato の Hariya は M.P.からの出稼ぎ労働者の娘 Sitva と結婚したが、その日のうちに博打で妻を取られてしまった。取った相手は Mahato の Sukva で、彼には妻子がある。Sitva は泣く泣く連れられて行っただが、Sukva とその家族の優しさに接して Hariya の人情のなさがいやになり、そのまま Sukva の家にいることにする。[評——炭鉱労働者であるダリト達を描いているが、主題はダリト問題ではなく、女性と愛情について。4月号で読者が、炭鉱には最早このような労働者はいないし、こんな作品は書かないほうがいい、と批判している (H1994-4-10)。]

H1994-2-48 (報告) Jati Yuddh ka Ahvan Hai 'Trishul' ('Trishul' はカースト戦争の呼び声だ) Kamal Locan Pandey

内容——Shivmurti の Trishul について Ilahabad で文学会。Dudhnath Singh らはカースト戦争を擁護する作品だと非難した。Ravindr Kaliya らはコミュニズムを批判した作品と評価した。Bare

Lal は Shivismurti をヒンディー文学の最初のダリト作家だと言った。Amarkant も Shivismurti がダリト出身の作家である旨を発言した。

H1994-2-71 (短編) Vah Mara Nahin Hai (彼は死んでいない) Narayan Singh

物語 —— 貧しい家庭の少年がクリケットの才能を見出され、州の代表にまで選出されて競技したが、実業団の選手に選ばれる選考会で暴力事件を起こし、前途を絶たれる。[評 —— この少年の家は、皮革の匂いがし豚を放し飼いにしている地区にある。しかし、この少年の家のカーストに関する言及はなく、少年がカーストや居住区に関して誹謗中傷される場面もない。選手の選考の背景にはお金や政治があり、著者はそれに焦点を当てているため、この少年の家庭について中途半端な設定が現実感を殺いでしまった。]

H1994-3-32 (評論、Marathi) Akkarmashi ki Janmapatri (『アッカルマーシー』誕生の逸話) Sharankumar Limbale

内容 —— 父は村の Police Patil、母はその妾でマハール。母の父はムスリム。村はカースト制に厳しい。妾の子であるので、学校で父の名前が書けず、誰からも差別された。高等学校ではシェークスピアを読み劇を書いていた。B.A.の後、Marathwada で就職した。上位カースト者として振舞っていたが、Namantar 運動を見てカースト意識に目覚め、以前に書いたものを捨て、Dalit 文学を書こうと決意した。Dalit の自伝を読み、自分の人生は違うと思って、Akkarmashi を書く決意をした。Dalit の自伝に対する批判には、Dalit の著者は自分の経験した苦しみを元手にそれらを見せびらかしているとか、中流階層の読者を驚かそうという意識で書かれているというものがあるが、Dalit 作家は自分の思い出を書いているだけだ。Dalit 達は Dalit の自伝を自分達の恥を曝すものと受け取ることが多い。Akkarmashi という題名の意味は 11mashe。12mashe=1tola に足りない、不完全という意味から、正式の夫婦の子でないという意味の罵りになる。

H1994-4-52 (短編) Pande ka Payan (パーンデーの旅立ち) Hrishikesh Sulabh

物語 —— ビハールの村。貧しい Tirlocan Pande は妻子を村に残し、Patna の親戚の Natvar Pande のもとに身を寄せる。Natvar は同郷の Dusadh カーストの Motilal に援助され、ある寺の祈祷僧として豊かに暮らしている。Tirlocan は貧しくともバラモンの誇りだけは高い。Motilal は不動産関係の仕事をしていて羽振りがよく、Tirlocan にも援助を申し出る。Tirlocan は Dusadh カーストの者とは口をきくのも嫌なほどであったが、生きていくためにはカーストの誇りなど言っていられないと決意する。[評 —— 村では SC、BC、Muslim らが連合してバラモンやタークルらと厳しいカースト対立をしているのに、Patna のような都会ではカースト対立などなく、逆に利益のために協力しあっている。都市部におけるカースト制の変容、カースト制の新たな利用と展開を描いている。]

H1994-4-67 (評論) Rahul ji ki Arthvatta (ラーフルの意義) Nandkishor Naval

内容 —— ラーフルは知性派の作家で、神を称える宗教を批判し続けた。1949年に発表した ‘Aj ki Rajniti’ では Harijan の寺院立ち入り闘争を無意味と批判した。また Harijan のための就職機会の留保制についても問題の解決にならないと批判した。1949年の UP 州での村落議会選挙で下層カースト民が躍進したことを受け、政治と経済活動において下層カースト民に活躍の機会が与えられれば理想的な社会が建設できるとした。

H1994-5-37 (短編) Riyasat (藩王国) Sunil Singh

物語 —— Prithviraj Cauhan の子孫という旧藩王が死亡し、その孫が統主として即位する儀式のために各地の Rajput が集まる。彼らはそれぞれの祖先や家系を誇り、相手を貶したりする。Sisodiya の子孫の者が Cauhan の元は Camar だと貶す。[評 —— Rajput が名誉のために命を賭けて争うのは昔の部族文化の名残である、というのは Rajput の出自を示唆していて興味深い。]

H1994-5-86 (書評) Raktranjit Dalit Utpiran ka Dastavez (血塗られたダリト虐待の文書)

Mohandas Naimishray

内容 —— Candanmal Naval 著 Marwar ka Amar Shahid Rajaram の書評。Rajasthan における人の生贄の歴史と犠牲となった Meghwal カーストについて研究した作品。

H1994-5-97 (風刺) Jati Julaha, Mora Nam Kabira (カーストは機織、私の名はカビール) Asim

Kumar Ansu

内容 —— カビールは jati na pucho sadhu ki と言ってカーストを問題にしなかったが、ベナレスの保守層はカビールが捨て子であったことから、Ramanand がバラモンの未亡人に生ませた子という話を作り上げ、カビールの名誉毀損と派の切り崩しを狙った。そこでカビールは一転して機織カーストであると言い始めたが、すでに時遅しであった。

H1994-6-19 (短編) Hansi-Hansi Panvan, Khiy Ole Beimanma (笑ってパーンをくれた悪い人)

Ushakiran Khan

物語 —— ビハールの村。近隣の村では下層カーストと地主層の争いが激しくなっているが、この村では村長 Munna Singh が表向き農民と労働者の融和を説いているため、争いは起こっていない。しかし、この村長も裏ではあくどいことをしている。村で労働者の若い人妻が行方不明になったり、暴行され殺されるという事件が起こる。村長はしばらく身を隠してから戻って来たが、この村長の実態を知った下層民の労働者達は村長と手下を殺す。[評 —— ビハールで起っている地主と農業労働者の闘争が地主による労働者の女性への暴行をきっかけとする場合があることを描いた作品。]

H1994-7-48 (報告) Rajdhani men Dalit Sahitya ki Dastak (首都にダリト文学の訪れ) Rupchand Gautam

内容 —— Dalit 文学をテーマにした文学会の報告。4月28日の会では Omprakash Valmiki が、ある雑誌が10年間待たせて結局掲載しなかった短編を ‘Hans’ 誌が発表してくれたので、作家としての今日があるという体験を述べた。Mohandas Naimishray は1993年に Sahitya Akadmi の雑誌に Barsat という短編が掲載されたが、Hindi 文学界ではまったく注目されなかったと述べた。5月14日の会では Naimishray が非 Dalit 作家の否定的態度について述べ、6月4日の会では Naimishray が Dalit 作家の責任について述べた。

H1994-7-60 (書簡) Ayenge Acche Din bhi (良い日も来るだろう) Shailesh Matiyani, Rajendr Yadav

内容 —— Shailesh Matiyani と Rajendr Yadav の書簡。Matiyani の書簡は、Yadav の文 (‘Hans’ 誌の編者の巻頭言) に対し Matiyani が送った批判文を Yadav が掲載しなかったことに対する抗議。Yadav は Matiyani の文が個人攻撃にすぎないから掲載しなかったとし、自分は Dalit の味方だが、自らを Dalit であると言ったことはなく、また、Dalit 文学が発展拡大することは誰にも止められない時代の趨勢であると反論した。また宗教と政治の権力にしがみつ়くことには賛成できないと Matiyani を批判した。〔評 —— 61ページに H1986-10-16の Matiyani の文 Harijan Kahne ka Matlab の抜粋が添えられている。Gandhi は Harijan という語を独立運動に際し Hindu を団結させるために導入したが、今では選挙で Hindu を分裂させるだけの語になっているという内容。この文が添えられている意味は不明。〕

H1994-7-88 (評論) Gandhi Banam Ambedkar Hamari Virasat Kya Hogi ? (ガンディー対アンベードカル 我々の遺産は何か?) Abhay Kumar Dube

内容 —— Gandhi はカースト問題については保守主義者であった。不可触制の社会的経済的根源を追求しようとせず、精神の浄化とか改悛で解決しようとした。Ambedkar は平等や人権思想を強調し、仏教に改宗してヒンドゥー教の運命主義と決別した。Ambedkar の後継者は市民意識をカースト意識に代わるものとして推し進めている。〔評 —— Gandhi の後継者が彼のカースト意識を超えてカースト制打破の運動を行ったというのは疑問である。また、Ambedkar が宗教儀式を廃したので後に仏教に関する組織、意識、著作などが発展しなかったというのも理解し難い。〕

H1994-7-90 (評論) Ambedkar Banam Gandhi (アンベードカル対ガンディー) Daya Pawar

内容 —— 不可触制の問題を Gandhi が Savarna Hindu の問題とし、Savarna が解決すべきであるとしたのに対し、Ambedkar は「不可触民」自身が権力を持ち、政治に参加するなどの方法を主張した。Gandhi は業の考えを信じていて、業によりカーストが決まり、人はカーストの職業に就くべきだと主張した。Ambedkar は最初ヒンドゥー教の改革を目指し、Mahad や Kalaram 寺院の

運動を Gandhi 主義的に Satyagraha により行ったが、Gandhi はこれに賛成していなかった。両者ともヒンドゥー社会の意識を変えようとした点で共通であったが、円卓会議からプーナ協定をめぐる一連の流れの中で Ambedkar は反 Gandhi で売国的と評価されてしまった。Ambedkar は土地の国有化によりカースト問題を解決する道も探ったが、Gandhi は土地改革に反対で、宗教性を失わせるとして産業の近代化にも反対した。しかし Gandhi は考えを改める長所もあり、晩年には Ambedkar の考えを入れて、異カースト婚に賛成した。憲法作成の委員長に Ambedkar を推薦したのも Gandhi であった。〔評—— Gandhi と Ambedkar を単に対立しただけの関係と捉えずに共通点も探る観点から書いている。客観的であれば、こういう観点も重要である。〕

H1994-7-92 (評論) Gandhi ji Shreshth The, To ? (ガーンディーは偉大であった、それで?)
Rajkishor

内容—— Mayavati の発言の背景は Dalit が Gandhi を知らないことにある。また普段から Gandhi 思想に相容れない BJP などが Gandhi 主義を擁護して Dalit 批判を行うので Dalit 側はますます警戒することになる。BJP が普段 Gandhi を批判するのは Savarna 内部の諍いであり、外部 (Dalit) から攻撃されると団結して防衛的になるということが Dalit 側にも分かった。Savarna 側が単に Gandhi の偉大さを言うのではなく、Gandhi 思想を実践すれば Dalit 側も Gandhi の偉大さを理解するであろう。〔評—— Gandhi 思想に疑問が突きつけられているのに、Gandhi は偉大であるという前提で論じており、議論になっていない。ただ、BJP も対 Dalit では Gandhi を擁護するという指摘は的外れではない。〕

H1994-8-44 (風刺) P. G. Bhauji ko Pranam (P. G. 嫂さんにご挨拶) Gautam Sannyal

内容—— Patna-Gaya Passenger の愛称は P. G. Bhauji である。地元の人は大抵が無賃乗車。人々は事ある毎に相手のカーストを尋ねる。死体も運ばれるがそれは Bhumihar の死体。水牛は Rajput のもの。Patna 大学の教員達は学内のカーストの勢力関係を言い合う。殆どがバラモンと Rajput の争い。〔評—— Bihar、Jharkhand の田舎の雰囲気はこうしたものなのだろう。〕

H1994-8-96 (評論) Gandhi Aur Ambedkar (ガーンディーとアンベードカル) Hrishikesh

内容—— Mayavati の発言以来、両陣営からでたらめな発言が続いている。Gandhi はカースト制を認めながら、不可触制を除去しようという背反的な立場をとり、窮地に陥ると「神の命令」と称して議論を回避した。Gandhi は非論理的で、宗教を利用する頑迷な Hindu に過ぎない。Ambedkar はこういう Gandhi の性格を見抜いていたのであり、両者が妥協する余地はなかった。〔評—— Gandhi と Ambedkar について基本的な妥当な見方である。〕

H1994-9-59 (随想) Acarya Rajnish Uvac (ラジニーシ師の言葉) (Bhalerao 著 Dr. Ambedkar aur

Osho より)

内容 —— Hindu 教についての Rajnish の考え。ヒンドゥー教が身分制に基づいていること、神話や経典には迷信や不合理が満ち満ちていること、ラーマ、クリシュナ、その他の神々が非人間的であることなどを厳しく指摘した。

H1994-9-96 (評論) Gandhi Aur Ambedkar ko hi Kab tak Mahanayak Mante Rahenge ? (ガンディーとアンベードカルだけをいつまで英雄扱いするのか?) Hemant Prasad Dikshit

内容 —— Daya Pawar は Ambedkar の『カーストの絶滅』がマルクスの『共産党宣言』より革命的だと言った (H1994-7-90) が、信奉者にこうした大言壮語が目立つ。Gandhi は Jinna がパキスタン分離を言った時には断食しなかったが、Ambedkar に対しては断食したし、Ambedkar は支持者の離反を恐れて Gandhi に妥協した。Gandhi は魂の声によって政治を混乱させたし、Ambedkar に従って改宗した人々は今も宗教儀礼に囚われている。

[評 —— 論理が粗雑。きちんと研究して書いたものではない。]

H1994-9-97 (評論) Gandhi Aur Ambedkar (ガンディーとアンベードカル) Asim Kumar Ansu

内容 —— Harijan という語が良くないなら、Dalit という語も良くない。Shudra や Ati Shudra を使う方が歴史が分かる。Ambedkar が Harijan という語に反対したのは単に反対のため。Ambedkar が Ahinsa の仏教に改宗したのは Hindu 教に未練があり、Gandhi の Ahinsa と同じ考えだったから。Ambedkar は Gandhi が自分の職業のことや息子の結婚のことでは Varna 制を守らなかったと指摘した。Gandhi は Ambedkar や Dalit に対して陰謀を企むことはなかった。[評 —— でたらめが多い。]

H1994-10-26 (短編) Bhay (恐怖) Omprakash Valmiki

物語 —— 母が行う Mai Madaran の祈りに作法通り屠殺した子豚の肉が必要なので、息子の Dinesh は探し回ってようやく川岸のスラムで望みの豚を見つけた。恐ろしい思いをしてやっと解体し家に持ち帰る。Dinesh は町の住宅地のアパートに暮らしていて、普通は会社勤めをしている。彼が SC であることを周りの人々は知らない。彼の友達の Tiwari も勿論知らない。Tiwari はいつも彼の家にやって来て、食事をするほどの間柄である。今日もやって来たので、母にうまく追い返してもらったが、彼は Dinesh が川岸のスラムにいるところを目撃していた。その夜、Dinesh は自分の真実がばれたと恐ろしくなり、狂ったように家を飛び出した。[評 —— 豚屋が Dinesh に対し、勉強してバラモンになろうとしている者と言って初めから敵対的な態度をとるのはいささか不自然であるが、作品のテーマがいわゆるダリト・ブラーフマンの問題であるので、このように書いたのであろう。]

H1994-10-90 (評論) Gandhi Shreshth Hain to Kislie ? (ガンディーが優れているのなら、それは何ゆえ?) Yogendr Kumar

内容 —— Mayavati の発言をめぐる言論界の反応で分かったことは、自称 Gandhi 主義者らのカースト意識と、ジャーナリズムにおける Savarna の特権意識であった。Harijan という語がこの国の抱える不義の子という意味になるのなら、Mayavati が異議を唱えるのは当然ではないか。Harijan という語は原インド人 (Avarna, Dravid) を Hindu 化する植民地主義的、Gandhi 主義的陰謀である。カーストを持つヒンドゥー教は宗教とは言えない。Gandhi は失敗した。留保制反対運動や昨今の復古的風潮を見ると、Rajkishor の指摘 (H1994-7-92) が正しくないことは明らかである。Dalit が声を上げると分離主義、カースト主義と非難されるが、Savarna のすることは愛国的と承認される。

H1994-11・12-31 (評論) Tvaca men aur Uske Pare (皮膚の内側と外側) Rajkishor

内容 —— 歴史的に下層民の女性や Dalit は歌謡などを残してきたが、一般的な基準に合うものではなかった。一般的な基準や技巧は Savarna が作ったものだからだ。Hindi では Bhakti 文学時代に Shudra や Dalit も作品を残したが、傍流に追いやられている。現代では作家は自己の状況を超えることができるので Savarna 作家も Savarna 主義の作品しか書けない訳ではない。〔評 —— Dalit も女性もより広い世界観を持つべきだという主張で、Dalit や女性にしか書けない文学という考えを牽制している。〕

H1994-11・12-102 (回想、Marathi) Main Khak men Mil Jana Cahti Hun (壊れてしまいたい) Mallika Amarshekh

内容 —— Marathi の Dalit 詩人 Namdev Dhasal の妻 Mallika Amarshekh の回想。Mallika の父は有名な革命詩人 Amarshekh。母は Pathare Prabhu カーストの人で、共に共産黨員。Mallika は次女。病弱の文学少女。Dhasal は義兄の友人で、当時売り出し中の Dalit 詩人。Dhasal の父は肉屋の店員。1974年6月に結婚。長男を出産した頃から Dhasal の自堕落な生活がひどくなり、酒乱、放蕩、暴力、浪費の繰り返し。男は皆卑しいものだと思う。〔評 —— 著者の自伝 'Mala Udhvasta Vhaycey' の Hindi 訳。〕

H1994-11・12-175 (評論) Ek Safar-Basmatiya se Bhanvari Bai tak (一つの旅—Basmatiya から Bhanvari Bai まで) Manimala

内容 —— 1992年9月 Rajasthan で起った Bhanvari Bai 事件 (州の女性向上事業の活動家である Dalit 女性が村の上位カーストに反抗したとしてレイプされた事件) で最高裁は彼女の勝訴とした。一方、1975年 Bihar 州で起った Basmatiya 殺害事件 (Camar の女性が地主の子を妊娠し認知を求めたため殺された) は迷宮入りである。こうした事件が裁判で勝利できるようになるまでに

は途中に多くの事件と闘いがあった。1980年 Bihar で生じた Parasbigha 村事件（Gaderiya と Yadav カーストの12名殺害）と Pipra 村事件（Camar14名殺害）はいずれも地主が下層民の女性を家に拘束したことに端を発している。最近のレイプ事件をめぐる村のパンチャーヤト裁判では女性の発言が判決に影響を与えている。村の女性の地位が向上したことがこうした変化の背景にある。

H1994-11・12-183（評論）Kaun Bolega ?（誰がしゃべるのか？）Ramnika Gupta

内容—— Bihar の炭鉱地域の村で Ravidas の青年が Kurmi カーストの娘と結婚したところ、青年は殺害され、娘は烙印されてどこかに隠された（1994年5月31日）。この事件について政治家による調査も入ったが、真相は語られず、新聞も深入りしない。この地域の石炭産業では Kurmi カーストが隅々まで権力を握っており、誰も手出しできない。

H1994-11・12-185（短編）Ras（クリシュナ劇）Maitreyi Pushpa

物語—— Nai カーストの娘 Jaimanti は結婚でだまされ、嫁いだ翌日に実家に戻った。その後は Nai の女として村人の結婚式や sanskar の儀式などの手伝いをして生活している。また歌が上手で結婚式には必ず呼ばれる。村の商人の家の結婚式に Ras 劇の一座が呼ばれ、クリシュナ役の男に恋心を抱く。しかし一座は突然去ってしまい、Jaimanti は心に傷を受ける。〔評—— カースト問題の作品ではないが、Nai 女性の生活の一端が描かれている。〕

1995年

H1995-1-10（読者の手紙）Uttarakhand Andolan（ウッタラーカンド運動）Omprakash Valmiki

内容—— Uttarakhand 州運動では27%の留保反対が運動の中心となっていて、共産党も BJP や会議派と差がない。上流社会の子弟が通う学校の生徒も留保反対のデモをし、現大統領の孫までもがデモに参加したと新聞が伝えている。〔評—— 当時の大統領（Shankar Dayal Sharma）の孫らの留保反対デモについては後に短編 Kuraghar（H 2000-11-72）で扱っている。〕

H1995-1-85（評論、Marathi）Sangte Eka yani Kahti Hun Suno（私の話を聞いてください）

Pragya Lokhande

内容—— マラーティー語のダリト文学における男性作家の自伝にはインドの伝統的かつ理想的な女性像が反映していて、ダリト女性の姿が正しく描かれていないという批判がある。カースト制と男性によって二重に抑圧されるダリト女性の真実の姿はダリト女性自らが自伝を執筆することで描かれるようになった。Kumud Pawade の Antahsphat、Bebi Kamble の Jine Amce、Shantabai Kamble の Majya Jalmaci Cittarkatha、Mallika Amarshekh の Mala Udhvasta Vhaycey の4作品が重要である。なお、Amarshekh の作品は夫の Dhasal 批判が主となっていて、他の3作品とは傾向が異なる。

H1995-2-9 (読者の手紙) Adhunik Hindi Lekhan Savarna Varg ka Lekhan (現代ヒンディー文学は上位カースト者の文学である) Omprakash Valmiki

内容 —— H1994-11・12-31において Rajkishor は現代ヒンディー文学を Savarna (上位カースト) 文学と呼ぶなど言いながら、文学の技巧は Savarna が発展させたと言っている。ダリト作家の表現に対し、Savarna 文学者の反応は一律で、私に対してもダリト問題以外のテーマで書くようにと強く迫ってくる。

H1995-3-24 (短編) Sanson ka Revan (吐息の群れ) Alamshah Khan

物語 —— ヤギ飼いの青年 Jagna が現金を得ようと始めた仕事は長距離トラックの荷台に積んだヤギが目的地まで死なないように立たせておくという仕事。只働きさせられそうになり、逃げ出す。〔評 —— Jagna のカースト名などには一切触れていないが、下層カースト民であることは明白。下層民の生活の実態をリアルに描き出す Alamshah Khan 独自の世界である。台詞の言葉は Rajasthan 南部の方言。〕

H1995-3-30 (評論、英語) Ashvet Saundarya Shastra (非白人文学の美学) Ayyappa Panikkar

内容 —— 1913年にケララの漁師カーストの K. P. Karuppan がシャンカラの思想に影響を受けて「不可触民」差別に抗議する詩を書いた。Narayan Guru も詩人的才能を活かして差別撤廃の運動を行った。Kumaran Ashan は当初古典的な作詩法の詩を書いたが、後に地域の民謡に近い形の詩に変わった。Candal Bhikshuki という詩では「不可触民」青年とバラモン女性の結婚に賛成し、仏教がいかにカースト制の中で衰退したかに触れ、Karuna という詩では仏教思想がカースト制に対抗する思想であることを述べた。ダリト文学、黒人文学、アフリカ文学などにはいくつかの共通点がある。1. 歌謡性の重視 2. 日常の言葉を重視 3. いろんな技法を自由に取り入れる 4. 主流の文学と対抗しつつも取り込まれる 5. 労働に根ざす文学 6. 地域や仲間に伝わる直接的な表現 7. 卑語の使用 8. ユーモアを失わない 9. 統一的な規格を持たない 10. 主流の文学とは異なる潮流の文学を提供する、など。〔評 —— マラヤラムのダリト文学が古い歴史を持っていることがわかる。シャンカラの影響をどう理解するかは微妙な問題である。(参照 H1995-4-28)〕

H1995-3-62 (評論) Dalit Katha : Vyatha ki Katha (ダリト文学：苦悩の文学) Nishikant Thakar

内容 —— バクティ文学期には神の前の平等が言われたが、18世紀以降再び保守的になった。近年マラーティー文学からダリト文学が伝わったが、ヒンディーにはダリト作家が殆どいない。80年代以降のマラーティー・ダリト文学は新しい中産階級の問題にも直面している。

H1995-4-28 (評論) Kya Shankar-Vedant Ek Asamajik Darshan Hai ? (シャンカラのヴェーダーン

タ哲学は非社会的哲学か?) Rudr Kant Amar

内容 —— シャンカラの哲学の3本柱は1. ブラフマは真理である 2. 現世は幻影である 3. すべての生き物もブラフマである、の3つ。しかし、シャンカラはマヌを賞賛していて、シュードラは哲学を学ぶべからずとしている。シャンカラの哲学は社会変革より個人の救済を称揚した非社会的で非人間的な哲学である。[評 —— 6月号に M. Shekhar の関係論文 (H1995-6-69)。]

H1995-4-40 (短編) Kabr-Bhai (墓兄弟) Omprakash Bhatiya

物語 —— Jaisalmer 県内の村。村長選挙が始まり、ヒンドゥー、ムスリムの各陣営は普段は相手にしない Meghwal カースト (指定カースト) を取り込もうと躍起になっている。ヒンドゥー側は Meghwal がヒンドゥーの仲間であることを強調し、ムスリム側は Meghwal が埋葬の習慣を持っている点に注目し、Kabr-Bhai (墓兄弟) と呼んで味方につけようとしている。選挙の当日、各陣営は不正投票をする。[評 —— vote bank としての SC や選挙の不正を描いた作品。Meghwal カーストの独特の習慣、ムスリムとの関係などは興味深い。]

H1995-4-46 (評論) Bhartiy Loktantr men Jati (インドの民主主義におけるカースト) Rakesh Kumar Sinha

内容 —— インドで民主主義が機能しない理由はイギリス支配の影響とカースト制である。イギリス支配の土地制度の中で農業労働者のシュードラが多く出現した。このカースト制を独立インドは継承した。カースト制のため連帯感と愛国心が損なわれ、社会は公平さを欠いて汚職が蔓延した。独立後の民主主義では数の力を分散させるために vote bank の政治を行った。昨今はヒンドゥー原理主義によりシュードラの力を dvij に吸収することも行われている。dvij の能力主義にシュードラは留保制度で対抗すべきである。[評 —— 多くの誤りや不確かな事柄を根拠として論を進めている。ガーンディーの理解も恣意的である。最終的にシュードラが支配を確立すべきだと説いているが、説得力はまったくない。(H1995-6-9の読者の手紙、H1995-6-73の Ishan の文も間違いを指摘している。)]

H1995-4-65 (短編) Dikshant (卒業) Rajendr Lahariya

物語 —— ガーンディー主義者となった Sarju は村で奉仕活動をしていたが、カーストの争いに巻き込まれ、全く孤立する。最後にかつて彼をガーンディー主義に導いた人物に助けを求めたが全く相手にされず、裏切られた Sarju はその人物を殺害する。[評 —— ガーンディー主義を名乗る団体の実態が建前といかに異なるかを示している。カーストの縛りの強さもよく書けている。]

H1995-5-44 (詩、英語) Dr. Ambedkar ki Kavitaen (アンベードカル博士の詩) Kanwal Bharti

内容 —— アンベードカル の著作の中に見られる詩をヒンディー語に翻訳したもの。不可触制と

ヒンドゥー社会を厳しく批判している。

H1995-5-48 (短編) Faisla (決意) Mira Sikri

物語 —— Dhobi カーストの娘が女兒を出産したため嫁ぎ先でひどい暴行を受け追い出される。その弟は Jamadar (清掃カースト) の娘と付き合っていて結婚しようとしているが、カースト追放にされるからと母親はひどく反対する。すると姉は自分の体験からカーストは妨害をするばかりで助けにならないと言って、弟の結婚に賛成する。〔評 —— カーストが構成員を拘束するのはどうの場合か、その不合理性を衝いた作品。また、カースト差別が下位カースト間にも厳然とあることも示している。女兒を出産したことで離婚されるという問題もある。〕

H1995-5-50 (短編) Postar Cor (ポスター泥棒) Zeb Akhtar

物語 —— Ganeshan は Madiga (Adiwasi) で故郷はタミルの村である。今は北インドの町で夜警をしている。このところ映画のポスターがよく盗まれるので映画館の主人は怒っている。Ganeshan は暴動で息子を失い、大政治家 (Rajiv Gandhi?) の暗殺の捜査に巻き込まれて娘を失った。彼は自分の人生は盗まれるばかりだと思う。〔評 —— Ganeshan の個人的な事情のように描かれているが、Adiwasi のみじめな人生の象徴としても読める。〕

H1995-6-52 (短編) Makkhi (蠅) Alka Pathak

物語 —— デリーに住む Mishra の家のすぐ近くで Rewtilal の家の盛大な結婚式がある。Mishra の家は元は村の大地主。一方 Rewtilal の父はチャマルで Mishra の家の農業労働者だった。チャマルの子せがれ Rewtilal が出世して自分より羽振りがよくなったことは Mishra にはとても我慢できず、彼の妻もある時 Rewtilal の妻を侮辱したことがあって溜飲を下げている。〔評 —— SC への差別意識の抜きがたいことを示した作品。題名の「蠅」は、Mishra の娘が都会ではカーストなど確かめていられないと言ったのに対して、妻が蠅 (SC) が入っていると分かったら食べられないと言ったことから。なお、大地主であった Mishra が独立後デリーへ出て苦勞するという設定は少し不自然かもしれない。〕

H1995-6-58 (短編) Hawa (風) Shiv Kumar Yadav

物語 —— ビハール州アラー近くの村。村落パンチャーヤト選挙でこの村が SC の留保選挙区となる。村の Yadav, Kurmi, Koiri らは Musahar の Sukhi-Bahu を立て、上位カーストのバラモン、タークルらはチャマルの Kali を立てる。結局 Kali は利用されただけで投獄される。選挙で争っていた筈の者達は皆仲間であった。〔評 —— 政治を食い物にするのはどのカーストも同じということが主題らしい。ただ、作品の構図は分かりにくい。題名の Hawa はいろいろに解釈しうる。〕

H1995-6-69 (評論) Shankar Vedant : Rupak ka Dikanstrakshon (Vikhandan) (シャンカルのヴェーダーンタ哲学：寓意の解体) Mani Shekhar

内容——Shankarの哲学は非社会的で非道德的である。彼の時代は『マヌ法典』が社会制度になっていた。まず『ギーター』がバラモンに世俗生活の道を開き、『マヌ法典』がそれを制度化してバラモンの富や快樂の享受を権利化した。一方シュードラの諸権利は奪われた。シャンカル哲学の3本柱は、1. ブラフマは神、2. 命(ある者)とは dvij のこと、3. Jagat=Mithya とはシュードラのこと、dvij が享受する対象、である。〔評——R. K. Amar の H1995-4-28を補う形で書かれている。シャンカル哲学が『マヌの法典』を基礎にしているとする。〕

H1995-6-71 (評論) Rajniti ki Bisat par 'Harijan' Mohre (政治の盤上の「ハリジャン」という駒) Sahdev Singh

内容——Gandhi はヴァルナ制やカースト制を容認し、「不可触民」を分裂させた。Ambedkar は Gandhi が 'Navjivan' 紙上に次のように述べたと指摘した。1. ヒンドゥー社会はカースト制の上に存続してきた。2. 各カーストが任務を果たせば独立につながる。3. カースト制を生み出す源には組織力がある。4. 異カースト婚や共食は国民の統合には不必要。5. カースト制に反対する者に反対する。Gandhi が「不可触民」を「不可触民」のままにしておいて救済しようとした点を Ambedkar は最も批判した。Ambedkar は Gandhi の Harijan Sewak Sangh の目的は「不可触民」の向上ではなく、ヒンドゥー教徒のためにカースト制を守ることだ、と言った。1932.4.24 にプーナ協定に署名した後、Gandhi を含むヒンドゥーの指導者は Malaviya が持参したガンジスの水で身を清めた。皮肉にもその Malaviya が1932.9.25に「不可触民制撤廃連盟」の設立を発表した。議長は G. Birla、書記長は A. L. Thakkar、中央委員8名のうち3名は「不可触民」で、それらは Ambedkar、Shrinivasan、M. C. Raja であった。同年11月に意見が対立し「不可触民」委員3人が脱退すると、Gandhi は連盟の名称を「ハリジャン奉仕者連盟 Harijan Sewak Sangh」に改称した。この組織では「不可触民」が「不可触民」であり続けるように職業訓練を行った。Gandhi がこの組織を作ったのは自分を「不可触民」の代表として見せるためであった。1946年にイギリスのインド省の代表团とクリップスが来た時、Gandhi は Bhangi であることを装った。始めはボンベイのワルリーの「不可触民」地区に滞在しようとしたが、住民が反対して乱闘になり15時間外出禁止令が出された。そこで Gandhi はデリーに移り住んだが、Bhangi 住民の差し入れは食べようとしなかった。Gandhi はクリップスに Ambedkar が「不可触民」の代表でありえないことを執拗に説いた。クリップスが帰ると Gandhi は直ちに Bhangi 地区からビルラ邸に移った。クリップスが来る前、1945年12月に会議派は Ambedkar を退けることを目的として全インドの「不可触民」指導者の会合を開いた。1946年には Ambedkar とムスリム連盟の出した「不可触民」指導者 Yogendr Nath Mandal に対抗するため Jagjivan Ram を用意した。後に Jagjivan は結局首相になれなかった。Jagjivan がベナレスで Sampurnanand の像を除幕した時、像が穢れたとされ、ガ

ンジスの水とミルクで清められた。Tilak、Gandhi、Vinobaらは『ギーター』の信者で、svadharme nidhanam shreya pardharmohi bhayavaha の意味を先祖の職業を守り続けることとしていた。ならば Gandhi はなぜ商売をしなかったのか、息子とバラモンの娘の結婚になぜ反対しなかったのか。晩年 Gandhi は異カースト婚を認めるようになった。〔評—— Gandhi 派はこうした指摘にきちんと答えるべきであろう。〕

H1995-6-73 (評論) Bhartiy Loktantr men Jati (インドの民主主義におけるカースト) Ishan

内容—— R. K. Sinha の H1995-4-46を批判した文。1. Sinha はインドの民主主義が正常に機能すれば政権はシュードラつまりダリトや BC の手に渡るとしたが、現在の資本主義体制においてそれは可能か？Lalu、Mulayam、Kanshiram、Mayavati らは結局資本家に奉仕するだけ。2. Sinha はイギリス支配以前はシュードラにも実権があり、教育、政治などで活躍したとするが、一般の解釈とは正反対である。3. イギリス支配の過程で dvij に権力が移ったというのも誤りである。4. 独立後のインドが失敗したのは重工業重視のせいとするが、真の原因はそれを食べ物にした資本家に求めるべきである。Gandhi 主義者は資本家を追及せず、重工業のせいにする。5. Sinha は Gandhi の労働思想に共鳴しているが、Gandhi は労働者が政治的実権を握ることに反対した。6. マルクスの思想は労働から解放される (Sinha) ではなく、労働の搾取から解放されるということである。7. 留保制度は外国資本が拡大すれば不可能になるのではないか？〔評—— 1 の Lalu 以下については、結局そういう表現もできるだろうが、カーストによる富の奪い合いの側面も無視できない。7 は不明。その他は概ね批判の通り。〕

H1995-7-49 (短編) Ras-Beras (期待と興ざめ) Jaynandan

物語—— Pasi カーストの娘が地主の息子と結婚する。かつては貧しい者のために働くような優しかった娘がやがて残酷な地主の嫁になっていく。最後には地主の不正と闘う兄に無駄なことはするなと言う。〔評—— 解しかねる作品。ダリト出身の者でも立場が変わると、人格がすっかり変わるということを示している。現実にはそういうことはあるだろうが、それによって作家が何を訴えたいのか理解しがたい。ダリト問題に対する悪意すら感じられる作品である。(H1995-9-10 に読者の批判。)]

H1995-7-56 (評論) Sac ko Hathiyar Banane ki Kala : Dalit Lekhan (真実を武器にする芸術：ダリト文学) Rana Pratap

内容—— ダリト文学の研究がヒンディー語でも進んできた。Ashvaghosha の Vajra-Suci の研究。Mahabharata における Shvapaca の研究。Shudra 王 Atravema についての Guleri の言及。ダリト文学はダリトにしか書けないという議論は、広く見れば正しいとは言えない。非抑圧者文学という見方で捉えるべきだ。ヒンディーでは1976年に Premkumar Mani と Arjak Sangh の協力でパトナ

でダリト文学をめぐる初めての文学会が開かれた。1977-78にはパトナからダリトの週刊誌 ‘Badlao’ が刊行された。Bhagvat Sharan Upadhyay の Shudra や Nagi Reddi の作品を掲載した。Mani のダリト文学を紹介する文が ‘Janyug’ 誌に掲載された。その頃、進歩主義作家連盟 PRO は Madhukar Singh や Premkumar Mani の作品をヴァルナ主義文学と批判したので、数人の作家が PRO を離れ、ナクサル運動に接近した。‘Kathantar’ 誌の1983年4-6月号はダリト文学を特集し、Yawatmal のダリト文学大会の報告をした。つまり、ヒンディーでも早くからダリト文学の動向は紹介されていた。Jan Sanskriti Manc の第2回全国大会の宣言文にダリト文学との連帯が謳われたが、バラモン主義という用語を巡って紛糾した。結局この後この団体は衰退した。Vijaykant は14人の Adiwasi が殺された Rupaspur 事件を描いた作品を短編集に入れようとして出版社に拒否された。Hira Dom、Anjor、Rages Bhojpuri など Bhojpuri でもダリト文学の歴史がある。〔評 —— 70年代に ‘Sarika’ 誌がいち早くダリト文学を取り上げていたが、言及していない。Premkumar Mani らビハールの作家の活動についてはよく紹介している。〕

H1995-7-78 (評論) ‘Brahman’ Manahpravritti Hai (‘バラモン’ とは心的傾向である) Devendr Kumar Pathak

内容 —— ‘バラモン’ というのは人々の心的傾向であって、どのカーストにもその傾向は存在する。だから、Camar は Mehtar を差別するし、他に Dahayat や Mahobiya という SC も互いに差別しあっている。またこれらのカーストの女たちはバラモンが触れた水を飲まない。バラモンにもクシャトリヤにもサブカースト間の差別がある。こういう心的傾向を Ambedkar も正しく理解していない。ジャジマーニー制ではバラモンがチャマールのジャジマーン（雇い主）になっている。〔評 —— この指摘はカースト制ができた後の副産物についてであって、カースト制の根幹ではない。ジャジマーニー制の指摘も理解の混乱の産物で、結局何も意味していない。(H1995-9-12の読者の手紙が正しく批判している。)]

H1995-8-14 (短編) Dharmakshetre Kurukshetre (正義と人の営みの場で) Dudhnath Singh

物語 —— 女衞をしている Siu Manhato が息子の嫁にと思って騙されて買ってきた女は臨月間近だった。この女は人妻だったが、夫が他国に出掛けているうちにレイプされ妊娠してしまったので、家から追い出されたのであった。女は人買いの手に渡り、裏で一味になっているヒンドゥー僧の寺に預けられた。この寺に出家を許されたチャマール・カーストの者で Nagindas という寺の下働きがいて、これが女の身の回りの世話をするうち、僧の実態を知り、抗議して殺されるということがあった。女はその後 Siu に買われたのだった。Siu はこの女をすぐに転売しようと客を探す、その間に女は出産する。商品価値が下がるので、Siu が赤ん坊を殺そうと言うと息子は反対する。二人は争い、息子は死に、Siu もほぼ虫の息となる。女は赤ん坊を抱いて逃げる。〔評 —— Siu の息子の性格が良すぎる点や、最後の場面でジャッカルが赤ん坊を襲わなかったな

どの弱点はあるものの、小説としてはよくできている。Mahanto (Mahato?) のカーストが不詳である。Kahar カーストかもしれない。妙好人として寺に引き取られている Nagindas の逸話は興味深い。]

H1995-8-36 (自伝) Ek Dalit Barh (あるダリトの洪水) Mohandas Naimishray

内容 —— 3 日前から豪雨でダリト地区では家々の壁などが崩れる。浸水もひどく、糞が流れてきたりして臭い。コブラが流れてくるので大騒ぎになる。家々の崩れが続く。やっと昼に雨が上がり、兄が食事を差し入れてくれた。[評 —— Naimishray の自伝 Apne-Apne Pinjre (1995) の pp. 85-89 の部分。]

H1995-9-40 (小話) Gurudakshina (ご恩返し) Rangnath Diwakar

物語 —— 「不可触民」の生徒を目の仇にしていじめる Jha というバラモンの教師は今日もある生徒をひどく殴っていた。そこへ突然視学官が現れる。これはかつて生徒だった時この教師にいじめられた「不可触民」だった。教師は処分される。[評 —— ショートでダリトをこのように真正面から扱うのは大変珍しい。]

H1995-9-48 (短編) Abba ki Lathi (お父さんの杖) Tejbahadur Caudhri

物語 —— 独立前の村。地主はムスリム。他村に住んでいるが、とても良い地主。村民は殆どヒンドゥーで、1 軒だけムスリムの親子 (父と娘) がいる。父は盲目だが、村人に慕われ、娘も村人から大事にされている。村にバラモンの老婆もいて、食事に関わるダルマにはうるさいが、あとは皆と親しく暮らしている。この老婆が Jatav カーストの家族を訪ねて祝福をあたえたりする。ムスリムの娘の縁談がまとまり、村中で祝福して嫁入りさせる。Jatav 達は地主と村人の理解があるので幸せに暮らしている。[評 —— とにかく理想の村を作者は書きたかったのだろう。非現実的。]

H1995-9-59 (回想) Ramavatar ki Pareshani (ラーマーウタールの困惑) Ali Ashraf

内容 —— Yadav カーストの Ramavtar はベナレスで Shastri の学位を取得したので、Shastri と称していたら、人々は彼をバラモンと思い込んでしまい、本人も否定しなかった。逆にカーストのことを明かされそうになると怒ったりしたほどである。後に CPI からパटना西選挙区で 3 期下院議員に当選したが、選挙運動の時もカーストについては状況の成り行きに任せるというやりかただった。この方法は物理学理論によればバランスのとれた方法である。[評 —— H1995-11-10 の読者の手紙が鋭く批判している。]

H1995-9-62 (短編) Yuddh (戦い) Basant

物語——町の商人が死亡。連絡を受けたドームの Halkhu は葬儀の準備をして焼き場で待っていたが、遺体はベナレスへ運ばれたという。自分の祖先のことや差別のことを思っているとやりきれない。家に帰って来ると、妻はおいしい料理を作っている。町の金貸しの娘の不倫の子を墮胎させた臨時の収入が入ったからという。Halkhu は飲み食いして酔っ払い、妻にそんな仕事をすると殴りかかる。寝入った夫を見ながら、妻は息子に明日からはお前がドームの仕事をしなさいと言う。〔評——ドーム・カーストのやりきれなさ、日常の生活などがよく描けている。妻が産婆の仕事をしていることや、Halkhu の祖父がベナレスから移り住んだ逸話も興味深い。〕

H1995-9-80 (書評) Apne Salib (我が十字架) Sudhish Pacauri

内容——対象作品は Namita Singh の Apni Saliben。主人公 Nilima が結婚後 5 年目に初めて夫のカーストがチャマールであると分かり、騙されたと言って家を出るのは非現実的な設定である。夫が交通事故で死にそうになって、自分の過ちに気付く、夫に許しを請うところはメロドラマ的で、ダリト問題と女性問題がぶつかって相殺されている。流行のダリト問題を上位カーストの女流作家が同情を持って書いた作品である。〔評——主人公の分析と批判は的を得ている。H1995-11-9 の読者の手紙は Namita Singh をプレームチャンドの伝統を発展させる作家と評している。〕

H1995-11-35 (評論) Dalit Atma-Katha Aur Upanyas (ダリト自伝と小説) Ravindr Varma

内容——体験を書くだけでは文学にならない。偏見や劣等感に関わる個人的な体験を普遍化することが大切。ダリトの自伝文学はこれができていない。自己憐憫と自尊心が文学的価値を下げている。これを超えたところに小説の世界があり、ダリト小説が誕生すべきである。最近、若干のダリト作家がプレームチャンドを退けるような発言をしたが、ダリト作家はプレームチャンド的文学の伝統を理解し発展させるべきである。〔評——小説作法に関する理論はともかく、ダリト作家は自伝と銘打って発表しているのだから、このように批判するのは的外れであろう。Daya Pawar と Sharan Kumar Limbare の比較は両者の筆力の差の問題であって、そこから議論を小説作法に結び付けるのは無理がある。ダリト作家のプレームチャンド批判については具体的な資料が必要である。プレームチャンドの伝統を発展させたところにダリト文学の世界があるという意見は現在再検討されている。〕

H1995-11-37 (評論) Hindi men Dalit-lekhan ki Anivaryata (ヒンディーにおけるダリト文学の必然性) Ramesh Ritambhar

内容——数十年前マラーティー語のダリト詩集 Suraj ke Vanshdhar がヒンディー語に翻訳された時は衝撃を受けた。最近出た S. K. Limbare の Akkarmashi も大いに衝撃を与えている。ヒンディー文学ではバクティ文学に Kabir、Raidas、Dadu らが出た後、ダリト的な文学は殆どない。近現代でもダリト自らが書くことが殆どない。〔評——マラーティー語のダリト詩集 Suraj ke

Vanshdhar について H1995-7-56 に言及がある。]

H1995-11-56 (詩、テルグー) Jari Itihas (今現在の歴史) Shiv Sagar

内容 —— ヒンドゥー神話の英雄やマヌをチャンダーラが残酷な目に遭わせる、これが今生じている歴史だ。

H1995-12-32 (インタビュー) Hamen Daya Nahin Adhikar Cahie (我々は哀れみでなく権利を欲している) Sharankumar Limbale (聞き手 Omprakash Valmiki)

内容 —— マハーラーシュトラに Phule-Ambekar 運動の伝統があったから、Akkarmashi も受け入れられた。Hindi でも紹介されたが殆ど反応がない。Hindi では小説として出版されたからで、出版社の責任である。Marathi では1950年代まではダリト文学を誰も相手にしなかった。60年代に入って自分たちで出版を始めて認められるようになった。文学を担っていたバラモン達は自分たちの陣営に引き入れようとして、マラーティー文学の伝統を持ち出してきた。これに対してダリト側がブッダと Carwak を出して対抗すると相手は黙った。また、文学にカースト主義は要らないとか、自分たちもダリトについて書いてきたし、書けると言ってきた。彼らが書いたダリトは歪んだ像である (Jayvant Dalvi の Cakra、Madhu Mangesh Karnik の Mahimci Khari、Arun Sadhu の Bahishkrut など)。ダリト以外の作家にはダリト文学は書けない。また、ダリト出身でもダリト意識で書いてなければダリト文学ではない。S. M. Mate の Upekshitance Antarang も今は評価されていない。ダリト側にも3種類ある。1. 自分の苦悩を書いてまるで哀れみを請うているような作家、S. Kharat など。2. 戦闘的な作家、Dhasal、Dhale、Bagul など。3. 全く別世界でロマン主義の詩を書いている人、Gres など。2だけが本当のダリト作家だ。ダリト文学が反抗的な文学を書くと社会に亀裂が入るという批判も不当である。今まで差別してきて社会に亀裂は入ってなかったのか？ダリト文学に芸術性がないという批判も当たっていない。自分たちに暴虐が行われているのを芸術的にどう表現しろというのか？芸術性は私を武装解除するものである。解放運動がダリト文学の芸術性だ。ダリト文学が程度が低いというなら、なぜこんなに読まれるのか？それはダリト文学に人生の価値があるから。芸術主義者が花や自然は描いても苦しむ人に関心がないとは何という感受性だろう。ダリト文学の美学は別であり、Phule-Ambekar 思想がダリトの美学だ。ダリト文学が同じことの繰り返しという非難も当たっていない。既成の文壇はラーマの話をいくら書き続けていることか。ダリト文学は新しい作家をどんどん輩出している。繰り返しなどない。[評 —— ダリト文学と芸術性についてや社会の亀裂についての主張は正しい。繰り返しに関する既成文壇への批判は正しいが、ダリト側の主張が十分にできているとは言えない。非ダリト作家にはダリト文学は書けないという主張や、Kharat 批判は検証を要する。]

(2004年9月21日受理)